

# 楽器の認知度とその構造

## The level of awareness about musical instruments and its structure

生駒 忍 (筑波大学 人間総合科学研究科)

### 1. はじめに

本研究は、生駒・新里・畑中(2006)のデータの再分析によって、楽器の認知度(知名度)の定量化、および認知度の構造の探索的検討を行ったものである。

世の中には様々な楽器が存在し、その認知度もまちまちである。楽器の知識は、音楽に対する聴き方や、音楽活動への動機づけや社会的関心にも関わるであろう。そのため、教育や文化政策の点でも、また音楽の感性研究においても、注意を払うことが求められる。

しかし、どの楽器がどれだけ知られているかについての定量的な知見は今なお少ない。小川(1972)において第12カテゴリとして楽器が取り上げられており参考にはなるものの、いくぶん古い資料であることもありそのまま信頼できるものとは考えにくい。

また、楽器の認知度がどのような構造を持つかについてはほとんど未解明である。その構造からは、楽器の知識がどのような経路で形成されるのかをうかがい知ることができる。しかしこれまで、認知度が一次元構造を取るのか、それとも複数の成分によっているのかさえも明らかになってはいない。

そこで本研究では、生駒ら(2006)が大学生に対して行った質問紙調査に基づき、36種の楽器についてそれぞれがどれだけの割合の人々に知られており、それはどのような構造を取っているのかについて明らかにする。

### 2. 方法

調査対象者：生駒ら(2006)のデータのうち、本研究の分析範囲に欠損値のあった2名を除いた。よって分析対象となったのは大学生111名(男性31名・女性80名)となった。手続き：質問紙への回答を個別に依頼した。全て無記名で実施した。

調査内容：36種の楽器名を挙げ、それぞれに対してジェンダー・イメージ(その楽器がどの程度男性/女性向きか)の評定を1~7で求め、もしその楽器を知らない場合は0を選択させた。取り上げる楽器の選択にあたっては、音域、発音原理、使用場面・文化(和楽器・洋楽器・電子楽器・教育楽器)などを意識して幅広く多様なものが揃うよう配慮した。楽器名の表記は、国立国語研究所(2004, p. 200)にならった。

単に知っているかどうかの判断のみをさせる場合には、実際には全く知らない場合でも知らないと認めることには心理的抵抗があるため知っていると偽って回答されるおそれがあり、また名前を聞いたことがある気がする程度であっても知っているとして回答する可能性がある。具体的・実地的なイメージを要求されるジェンダー・イメージの判断と組み合わせることで、これらのバイアスを抑えてより妥当な知見が得られると考えられる。

### 3. 結果

36種楽器それぞれについて認知度を集計した。ジェンダー・イメージの評定(1~7)が回答された場合はその楽器を知っていると判断した。その割合を算出したところ、以下ようになった：

バイオリン, ピアノ, 三味線, トランペット, クラリネット, カスタネット, タンバリン, フルート, ハーモニカ, トライアングル, エレキギター ... 1.00  
ハープ, リコーダー, アコースティックギター, 尺八, 木琴, パイプオルガン ... .99  
エレキベース, 鍵盤ハーモニカ, アコーディオン, ウクレレ, サックス ... .98  
鉄琴, オカリナ, エレクトーン ... .97  
ホルン, チェロ ... .94  
トロンボーン ... .89  
マンドリン ... .84  
オーボエ ... .83  
コントラバス ... .82  
チューバ, ティンパニー ... .80  
ビオラ ... .78  
ピッコロ ... .72  
ファゴット ... .42

認知度の構造について、探索的因子分析によって検討した。分析には認知度が9割を切った9楽器のデータを用いた。ガットマン基準および解釈可能性から4因子解が採択され、最尤法バリマックス回転による分析結果を表1に示した。 $\chi^2(6) = 1.12 (p = .98)$ であったことから、このモデルは十分な適合度を持っていると考えられる。

#### 4. 考察

本研究では、楽器の認知度およびその構造について定量的な検討を行った。その結果、認知度は前ページのようになった。本研究で対象とした 36 種の楽器の大半は高い認知度を持っていると考えられる。ファゴットが目立って低い認知度を呈しており特徴的だが、楽器一般の中で極端に認知度が低いかどうかは必ずしも強く言えるものではなく、あくまで本研究の対象の中で見れば突出していたということであろう。

認知度の構造については、表 1 に示したような結果が得られた。もちろん、分析の信頼性を確保するために 9 楽器に絞ったこともあり、楽器全般の認知度が 4 因子構造であるとまで断定できるわけではない。しかし、単純に 1 因子構造になっているわけではないことは立証されたといつてよいであろう。また、ここで得られた構造は、楽器についての知識がどのようにして得られているのかについて興味深い示唆を与えるものである。第 1 因子はコントラバス、オーボエ、トロンボーンに高い負荷量を示し、一方で第 2 因子はチューバ、ファゴット、ピッコロに高い負荷量を示している。ピオラは両因子の二重負荷となっている。これらから考えると、第 1 因子はどちらかというところ、オーケストラにも参加しつつオケ外でのソロ楽器としての活躍も多くあるものに、第 2 因子はあくまでオーケストラの中の一員としての色合いの強いものに対応していると理解できる。よって、我々が楽器を知る上で、ソロやアン

サンプルで見かける機会と、オーケストラ（あるいは吹奏楽団）全体の中に見いだされる機会とがそれぞれ独立に寄与している可能性がうかがえる。あるいは、関心の向く楽器の方向性が人によって異なっているということかも知れない。また、第 3・第 4 因子はそれぞれティンパニーおよびマンドリンのみに特異的に負荷しており、よって少なくともこの 2 種の楽器は、他の楽器とは独立の機会ないしは関心によって学習されているのではないかと考えられる。

今後、より多様な楽器に着目して、認知度およびその構造について包括的なデータ収集と解明を進めることができたらよいだろう。また、楽器についての知識がどのようにして獲得されるかに焦点を当て、発達的な変化の追跡や比較文化的なアプローチから扱っていくことも興味深い。

#### 引用文献

- 生駒 忍・新里泰士・畑中美希 (2006). 大学生における楽器のジェンダー・ステレオタイプ 音楽心理学音楽療法研究年報, 35, 58-63.
- 国立国語研究所 (2004). 分類語彙表 増補改訂版 大日本図書
- 小川嗣夫 (1972). 52 カテゴリに属する語の出現頻度表 人文論究 (関西学院大学人文学会), 22, 1-60.

表 1 9 楽器の認知度に対する因子分析結果

	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	Uniqueness
チューバ	0.330	0.505	0.041	0.058	0.631
コントラバス	0.652	0.365	0.269	0.190	0.334
ピオラ	0.549	0.489	0.194	0.077	0.416
ファゴット	0.199	0.636	0.135	0.145	0.516
オーボエ	0.671	0.306	0.052	0.112	0.441
ティンパニー	0.261	0.288	0.901	0.180	0.005
トロンボーン	0.651	0.167	0.257	0.270	0.410
マンドリン	0.244	0.136	0.153	0.945	0.005
ピッコロ	0.203	0.617	0.255	0.046	0.511
SS loadings	1.918	1.635	1.099	1.079	
Proportion Var	0.213	0.182	0.122	0.120	
Cumulative Var	0.213	0.395	0.517	0.637	